

障害から学んだこと

関西創価高等学校

2年 茂見 勇輝

まさか障害というハンデを僕が背負うことになるとは思ってなかった。全ては自分の責任だが障害を負うということは、こんなに辛く苦しく大変なことだとは想像もしてなかった。

僕は現在高校二年で野球部に所属している。一年の秋、ピッチングの練習中に右肘に違和感を感じた。僕はこれぐらい大丈夫だろうと投げていくと、その直後に投げた瞬間「ボキッ」という骨が外れたような音と共に腕が曲がらず伸びなくなってしまった。すぐにチームのトレーナーの方に診てもらおうと、「すぐ病院に行かないといけない」と言われ、翌日病院に向かった。自分の中でもかなり重症の怪我だとは思いながら診察室に入った。まず最初に言われた言葉が「これは手術やな」だった。絶望した。怖くなった。話を聞いていくと、このまま自然治療で治すと日常生活程度では問題は無いが、野球をするととなると厳しいと言われ、一週間後に手術することを決意した。医者からは、早ければ術後二ヶ月でキャッチボールを始めたりして春には復帰できるだろうと言われ、少し希望を持ちながら手術に臨んだ。初めての全身麻酔、監督やトレーナーの方、家族にもたくさんの心配をかけながらも、無事大成功で終わったはずだった。しかし、意識が戻って、看護婦さんが「手も動きますか？」と聞いた時に、今までにない感覚が起こった。なんと右手の小指と薬指の感覚がなくなっていたのだ。原因は手術中に尺骨神経という神経に骨を止めていたボルトが触れてしまったのだという。

この日から、苦しい尺骨神経麻痺との闘病生活が始まった。退院して、学校に通うようになるとまずシャーペンを握る力がなく、左手で全て文字を書くようになった。またお箸も使うことができなくなり、左手でご飯も食べるようになった。一人だけ字を書くのが遅い。食べるのも遅い。みんなと同じように動かない指を見ると本当に毎日が辛くなっていった。テストなども時間が無くて大変な思いもした。今まで当たり前に行っていたことができなくなるのはこんなに辛いんだと感じた。それからは、日々耐えてリハビリをして、治すことに精一杯努力した。しかし、全く指が良くなる気配も感じられないまま三ヶ月が経ち、そろそろ次のステップに移らなければと考え、神経麻痺を治す手術をすることを決意した。内容は、肘の裏側にある尺骨神経をストレスのかからない表側に移行させるという手術である。最初は自分も怖くて反対の声も多かった。でも、もう一度野球をするとこれしか方法がなかった。そして手術当日絶対成功させると心の中で祈り臨んだ。二時間にわたる手術だったが、無事大成功した。手術から帰ってくると、動かなかった指が少し動いた。それを見た両親、監督、トレーナーの方が自分の事のように喜んでくださった。本当に感謝の気持ちでいっぱいになった。それからの経過は、順調に回復してて、感覚も少しずつわかるようになって

ってきたりと成長している。でも、野球をするとなると、実際問題厳しい状態である。でも、僕は支えてくださる方々のためにも悔いを残さないためにも絶対に治す。そして自分が復帰して投げてる姿を見て、勇気や希望を与えられるようにこれからの日々、闘い抜く。最後に障害は一見、不幸だなと感じると思う。しかし、その人自身が強くなれるチャンスであると思う。だから、悩んでいる人も自分に負けずに闘ってほしい。